ビージーズ・サウンドに、ああ、踊りたくなってくる。

連載

あのシーン、あのセリフ、あの仕草、
忘れられないことばかり。

# さあ、映画の話をしよう。

金丸弘美
フリーエディター

## 今年はダンスが踊りたい。

映画『フォーエバー・フィーバー』より

ジョン・トラボルタ主演の『サタデー・ナイト・フィーバー』（一九七七）のパロディで、シンガポールの『フォーエバー・フィーバー』（一九九八）が、実にご機嫌だった。

ブルース・リーの熱狂的なファンで、スーパーの店員、さえないメイが、仲間と映画館で観た『サタデー・ナイト・フィーバー』にすっかり魅せられ、画面から飛び出してきたトラボルタに、ダンスと男のありかたのアドバイスを受けて、ダンス大会に出場をするまでが描かれる。

設定が一九七七年になっていて、まるでタイム・スリップしたよう。あの頃、今はすっかり子育てしている友人もディスコにはまってたなとか、ブルース・リーの『燃えよドラゴン』（一九七三）が初めて公開されたとき、映画館から「アチョー！」と奇声をあげながら出てきた人が何人もいたことを思い出す。

トラボルタもリーも、シンガポールでも日本同様に受けていたのだ。映画からトラボルタが出てくるというのは、ウディ・アレンの『カサブランカ』（一九四二）のパロディ『ボギー！　俺も男だ』（一九七二）でボガートが登場するのと同じ。でもイタリア系で、ペンキ塗りの仕事しているトラボルタの方が、ボガートよりも、うんと身近に感じ、主人公メイが、スクリーンと現実の見境がつかなくなる気分がとてもよくわかる。

で、音楽が「カンフー・ファイティング」やビージーズ、おまけにバイクが欲しいメイが、バイク店で女の子を乗せて疾走する姿を夢想すると『真夜中のカーボーイ』（一九六九）の『噂の男』が流れる。当時の日本でも巷にあふれたものと同じだ。タイム・スリップをして、音楽があふれ最後にダンスをして恋が生まれる。おやこれは『バック・トゥ・ザ・フューチャー』（一九八五）と同じであった。しかし『バック～』は、一九五〇年代で一回り上の世代のアメリカのよき時代。ところがこの『フォーエバー～』が、とても親近感を覚えるのは、まさに同じシーンが日本にあり、青春と当時の気分がすっかり重なってしまうからだ。で、流れる音楽はすべてカバーバージョンで本物そっくり。すべて借り物。登場人物のファッションもメイクも妙にけばけばしい。キッチュだ。そのあたり、なにか形を追っていた若い時代の気恥ずかしさ、まだ自分のアイデンティティを持ち得ない気分をよく表していて、とても共感してしまった。笑っているうちに、バブル時代の、日本そのものが借り物だったなという思いも巡り、ちょっと複雑。

それでもダンスシーンに思わず体が動いてしまうのは、音楽によって、主人公がそうであるように、自分の中のもともとある生命力が衝き動かされるからに違いない。

周防正行監督の『Shall we ダンス？』（一九九六）は、ちょうど『フォーエバー・フィーバー』の世代が勤め人になって、どこかに青春を置き忘れ、照れながらおずおずと、ダンスによって、抑圧された会社勤めの日常から、自分自身を取り戻す映画だったのだ。

そういえばダンス映画の多くは若者が中心。キューバの青年チャヤンが、アメリカに出て、ヴァネッサ・ウィリアムズと組んでダンスコンテストに出る、『ダンス・ウィズ・ミー』（一九九八）なんか観てると、肉体と情念とダンスが、そのままストレートに結びついている感じ。普通は、ああはならない。

田舎に公演途中のフラメンコ・ダンサーが迷い込み、彼女たちのダンスで会計士の主人公のパッションが蘇る『踊れトスカーナ』（一九九六）というイタリアの楽しい作品があったが、普通はどぎまぎしながら、ダンスに触れ、なかなか踊りには至らず、自分の中の眠っている生を確認するのがせいぜいかもしれない。

でも、沖縄・粟国が舞台の『ナビィの恋』（一九九九）では歌があふれ、ナビィ（平良とみ　七一歳）とサンラー（平良進　六五歳）が、恋をして踊っていたのだった。うん、踊りは命そのものだ。眠っている生命を取り戻しに明日は踊ろうか？

原題：FOREVER FEVER／監督、脚本／グレン・ゴーイ／出演：エイドリアン・パン、メダリン・タン／'98年シンガポール作品／95分
解説：スーパーに勤めるホック（エイドリアン・パン）は、ダンスコンテストの賞金5,000ドルでバイクを買うことを夢見て、ダンス教室へ通いだす。日に日に上達していく彼に次々と災難が……。
●3月下旬より、東京・恵比寿ガーデンシネマにて公開予定。

かなまるひろみ●フリー・エディター。毎年恒例となった『ライターズ・ネットワーク大賞』の第5回目が2月19日に開催。年々盛況で、今年も全国、海外からも参加者が予定されている。